

「熏習（くんじゅう）」

小川 義浄

私は一昨年まで、九州のお寺でお世話になっておりました。そのお寺では、たくさん子どもたちとの出遇いがありました。その出遇いを通して「自分のお寺に戻ったら『日曜学校』を始めよう」と考えておりました。そして、その念願が叶い、昨年から日曜学校を始めることができました。

日曜学校を始めたのはいいのですが、なかなか私の思いがはっきりしない中、ある先生から「熏習」という言葉を教えていただきました。この「熏習」の意味を紹介しますと、「すぐれた人に親しんでいると、気づかないうちに、自分もすぐれた人になれる」という教えであります。

お部屋で線香を立てますと、部屋や敷物まで線香の香りが染みついてしまうように、人の精神や行いが心の奥底まで影響をあたえることであります。

よくよく考えてみますと、私自身もお寺で生活させていただく中で、自然に手を合わせ、正信偈を読んでおりました。この「熏習」という言葉を聞き、繰り返し繰り返し行うことで、自然に体に染みついていくことは大切だと思いました。

毎日の生活の中で、躰や規範意識などは、大人から子へ、そして次の世代へと熏習されて育つものです。大人や親の在り方がどんなに大切であるか、思わずにはいられません。そのことは、お寺にも当てはまると思います。

今、お寺の在り方が問われています。私は、「お寺」はみんなが集まり、共に学び、出遇う場だと考えております。そしてたくさんの方々に仏さまに親しみを持っていたきたいと願っております。ありがたいことに子ども達だけでなく、お父さん、お母さんも一緒にお寺に来ていただいているので、私は集まってくださったみなさんと共に、仏さまに親しみをもち、自然に手が合わさる人間に成っていきたいと思っております。